



# 《生との訣別》

～カゼツラと南葵音楽文庫～

近藤秀樹

2019年11月16日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

南葵音楽文庫  
和歌山県立図書館内  
和歌山市西高松 1-7-38  
tel.073-436-9500  
https://www.lib.wakayama  
-c.ed.jp/nanki/



はじめに: アルフレード・カゼツラ

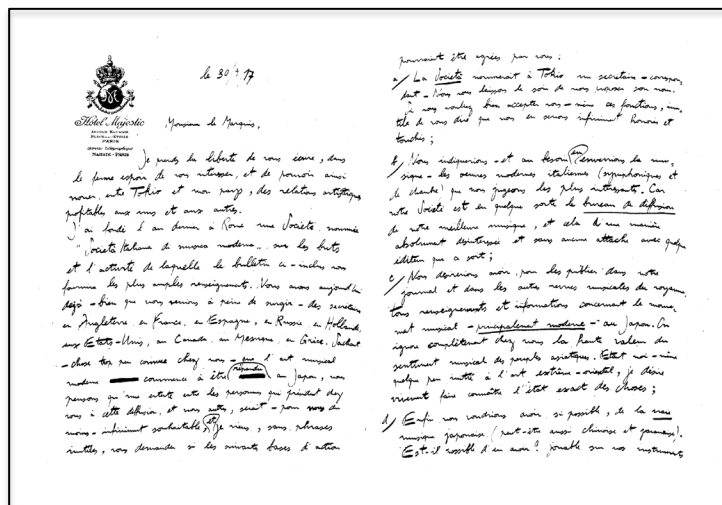
(Alfredo Casella 1883-1947)

- 20世紀のイタリアを代表する作曲家の一人。  
ピアニスト、評論家としても活躍。
- パリ音楽院で学ぶ。歌劇偏重を排して、  
器楽曲の作曲に力を注ぐ。 cf. 「80年代の世代」
- 1917年にイタリア現代音楽協会(SIMM)を立ち  
上げる。

## 1. カゼツラと頼貞

### カゼツラが頼貞に宛てた手紙

- 1917年9月30日付。  
パリのマジェスティック・ホテルの  
便箋を使用。文面はフランス語。
- 頼貞に、SIMMへの協力を要請。  
東京に協会の支部を置きたい/  
イタリアの現代音楽を紹介したい/  
日本の音楽について知りたいetc.



### 頼貞とカゼツラ

- 直接の面識はなかった? 頼貞のアドレスはイギリスの楽譜出版社チェスターで知る。
- カゼツラは「頼貞侯」を「日本の楽壇をリードしている重要人物」として認識。

### 頼貞は返事を書いたか?

- 不明。頼貞の『薔庭樂話』『頼貞隨想』などの著作にはカゼツラは出てこない。
- 当時の頼貞は SIMM どころではなかった?  
カミングスコレクションの入手/南葵樂堂の建設/パイプオルガンの購入 etc.
- カゼツラの側も東京支部どころではなくなった?

SIMMは資金難で消滅(1919年)→改めて「イタリア新音楽協会」を立ち上げ(1923年)

## 2. カゼッラと南葵音楽文庫

- ・南葵音楽文庫では、カゼッラの作品や著書を所蔵。

### 楽譜:

- ・歌曲集《生への訣別》 *Adieu à la vie*
- ・《2台のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための協奏曲》  
*Concerto per due violini, viola e violoncello*
- ・バレエ《水上の僧院》 *Le couvent sur l'eau*, Fragments symphoniques pour orchestre
- ・狂詩曲《イタリア》 *Italia* ; Rhapsodie für grosses Orchester, op.11
- ・《プバツエッティ》 *Pupazzetti*; Cinque musiche per marionette.
- ・《セレナータ》 *Serenata per Clarinetto, Fagotto, Tromba, Violino e Violoncell*

### 書籍:

- ・『音楽の進歩』 *L'evoluzione della musica* (1924年)
- ・『ピアノ』 *Il pianoforte* (1937年) [※新収蔵]

- ・チェスター社から、カゼッラを含む同時代の作曲家の楽譜や書籍を購入。

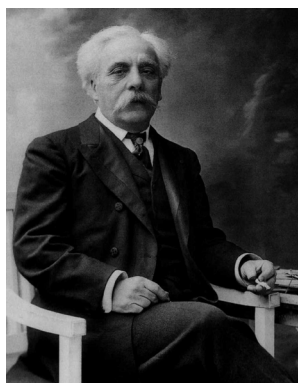
ex. *Miniature essay : Alfredo Casella*, 1923.

- \* 楽譜の広告を兼ねた(?) 小冊子のシリーズの一環。  
カゼッラの業績と作品を簡単に紹介。全16ページ。

## 4. タゴール、ジッド、カゼッラ～歌曲集《生への訣別》

- ・巴里の伊太利人

カゼッラはパリに留学(1896年～)。パリ音楽院でフォーレの作曲の授業を聴講(1900～01年)。フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、ストラヴィンスキーらの影響を受ける。パリ時代の作品にはフランス音楽の影響が顕著。ヴェルレーヌ、リシュパン、サマンら、フランスの詩人の詩で歌曲を作曲[下の表]。



ガブリエル・フォーレ

《5つの抒情詩》 <i>Cinq Lyriques</i> 1902-03年	
〈雲〉 <i>Nuageries</i> , 〈涙〉 <i>Larme</i>	(リシュパン)
《3つの抒情詩》 <i>Trois Lyriques</i> 1905年	
〈異国の夕暮れ〉 <i>Soir païen</i>	(サマン)
〈落日〉 <i>Soleil couchant</i>	(ヴェルレーヌ)
〈舟を漕ぎながら〉 <i>En ramant</i>	(リシュパン)
《ひび割れた鐘》 <i>La Cloche fêlée</i> 1904年	(ボードレール)
《ソネット》 <i>Sonnet</i> 1910年	(ロンサール)

• 歌曲集《生との訣別》 *L'Adieu à la vie* (1915

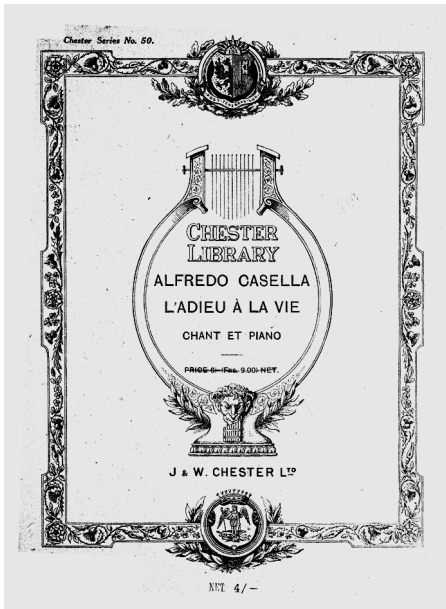
年)1915年の4月～7月にイタリアで作曲。チェスターから刊行(1921年)。

タゴールの詩集『歌の捧げもの』の仏訳(A. ジッド訳)から四篇を選んで作曲。

ソプラノ歌手クレール・クロワザ(Claire Croiza 1882-1947年)に献呈。

1926年には管弦楽伴奏版も作られた。

様式的には、それ以前にパリで書かれた歌曲よりも、《9の小品》作品24(1915年)等のピアノ曲に接近。



アルフレード・カゼッラ  
歌曲集《生との訣別》楽譜の表紙

I. <おお、生の最後の完成でかる死よ……>	Ô toi, suprême accomplissement de la vie... (第91篇)
II. <死が、あなたのみ使いが、私の戸口に来た。>	Mort, ta servante, est à ma porte. (第86篇)
III. <この出発のときに……>	À cette heure du départ... (第94篇)
VI. <最後の礼拝のなかで……>	Dans une salutation suprême... (第103篇)

• タゴールの詩集『歌の捧げもの』(ギタンジャリ *GITANJALI*)

インドの大詩人ラビンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore 1861-1941)の詩集。

ベンガル語で執筆。1912年に詩人本人が英訳。ジッド仏訳はこの英訳を底本とする。

恋愛詩の形をとりつつ、宗教的なテーマを歌う。

多くの作曲家により音楽化される。

ex. クラウス《歌の捧げもの》、ツェムリンスキー《叙情交響曲》etc.

カゼッラは仏訳版全103篇から、詩集終盤(「死」がテーマとなる)の四篇を選択。

- ① 第一次世界大戦の影
- ② イタリア帰国後(1915年～)の不遇な状況を反映(天野秀延)
- ③ 「デ・キリコの絵にも似た青ざめた不気味さ」(John C. G. Waterhouse)

## I.

Ô toi, suprême accomplissement de la vie, Mort,  
ô ma mort, accours et parle-moi tout bas !  
Jour après jour j'ai veillé pour t'attendre ;  
pour toi j'ai supporté les joies et les angoisses de la vie.  
Tout ce que je suis, tout ce que j'ai, et mon espoir et mon amour,  
tout a toujours coulé vers toi dans le mystère.  
Un dernier éclair de tes yeux  
et ma vie sera tienne à jamais.  
On a tressé les fleurs et la couronne est prête pour l'époux.  
Après les épousailles l'épousée quittera sa demeure  
et, seule, ira dans la nuit solitaire, à la rencontre de son Seigneur.

おお、生の最後の完成たる死よ  
私の死よ、駆けつけて、私に囁いてくれ！  
来る日も来る日も、私はお前が来るのを待ち続けていた。  
お前のために、世の喜びも苦しみも担って来たのだ。  
私の存在 私が持っているもの、私の望み、私の愛は  
すべて、いつもお前に向かって流れていたのだ、神秘のなかを。  
お前の眼の最後の閃きによって  
私の命はお前のもとなるだろう。  
花は編まれて、花環は花婿のために用意されている。  
婚礼の儀の後で、花嫁は家をあとにし  
ただ一人、夜の静寂のなかに入って行き、花婿に逢うであろう。



▲ タゴール

[英語版&仏語版・第91篇 ベンガル語版・第116篇]

### ・タゴールとベートーヴェン

カゼツラは、ベートーヴェンの《ピアノソナタ》第32番 作品111の第2楽章 Arietta (Con Variationi) を、タゴール『歌の捧げもの』の最後(の詩)と比較。

(1918年に Ricordi 社から刊行された、ベートーヴェン《ピアノソナタ》のカゼツラ校訂版の註)

……そして、私の思うのには、このアリエッタ [第2楽章] を照らしている、眩いと同時に神秘的なあの不可思議な光は、私たちをして、あのもうひとつの素晴らしい詩の終わりを考えさせずにはいない。すなわち、ラビンドラナート・タゴールの『歌の捧げもの』である。この詩集の最後の詩を繰り返し読むがよい。そうすれば、このインドの詩人哲学者が語る「涅槃」(ニルヴァーナ)の中に、この至高の音楽作品についての、美学的で人間的な、最良の註釈が見いだされるであろう。(アルフレード・カゼツラ)

## VI.

Dans une salutation suprême, mon Dieu,  
que tous mes sens se tendent  
et touchent ce monde à tes pieds.  
Pareil au nuage de juillet traînant bas sa charge d'averses,  
que mon esprit s'incline devant ta porte dans une suprême salutation.  
Que les cadences de mes chants confluent en un accord unique  
et rejoignent l'océan de silence  
dans une suprême salutation.  
Pareil au troupeau migrateur d'oiseaux qui, nuit et jour,  
revolent impatients vers les nids qu'ils ont laissés dans la montagne,  
que ma vie, ô mon Dieu, s'essore toute vers son gîte éternel  
dans une suprême salutation.

最後の礼拝のなかで、おお、神よ、  
私のすべての感覚が拡がり、  
あなたのみ足のもとで、この世界に触れますように。  
夕立を降らせようと七月の雨雲が重く垂れこめるように、  
私の心があなたの扉の前で跪きますように、  
最後の礼拝のなかで。  
私の歌のさまざまな節が、一つの流れに合流し  
ただ一つの和音となって、沈黙の海に流れ入りますように、  
最後の礼拝のなかで。  
渡り鳥の群れが、夜も昼も、  
夢中で飛びつづけ、山に残してきた巣を目指すように  
わたしの全生涯が、おお、神よ、永遠の住処に向かって翔びますように、  
最後の礼拝のなかで。



▲ ジッド

[英語版&仏語版・第 103 篇(最後的一篇)/ベンガル語版・第 148 篇]

## ○ 参考文献

- ・『カゼッラ ピアノ作品集』校訂: 関孝弘、カワイ出版、2010 年。
- ・天野秀延『現代イタリア音楽』音楽之友社、1960 年。
- ・近藤秀樹・篠田大基「資料紹介 カゼッラ自筆書簡」、  
『南楽音楽文庫紀要』第 1 号、和歌山県立図書館、2018 年
- ・タゴール『歌の捧げもの』高良とみ訳 <http://linden.main.jp/tagore/gitanjali.html>
- ・ *Guide de la mélodie et du lied*, sous la direction de Brigitte François Sappay, Fayard, 1994.
- ・ CD: Alfredo Casella, *Le liriche degli «anni di Parigi»*, Tactus, TC880301, 2018.